

大祓祝詞の第三章に入ります。この章は前章で述べましたように、人類の第一精神文明時代から第二の物質科学文明時代に入り、その目的である物質科学文明を創造する為の方便として、弱肉強食の生存競争社会を現出させた結果、社会に起って来る種々の罪穢について説明する章であります。先ずこの章の全文を載せます。

國中くぬちに成り出でむ、天益人等あめのますひとが、過ち犯しけむくさくさ雑々の罪事は、天津罪あはな みぞう ひとは、畦放ち、溝埋め、樋放ち、頻蒔き、串刺し、生剥ぎ、逆剥ぎ、屎戸くそど、幾許ここたくの罪を天津罪と宣りわけて、国津罪しきまとは、生膚断ち、死膚断ち、白人胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆虫の災、高津神の災、高津鳥の災、畜仆し、蠢物せる罪、幾許ここたくの罪出でむ。

以上が大祓祝詞の罪についての文章の全貌です。読んで直ぐに分かることですが、祝詞は人類の中に現われて来た罪穢を天津罪と国津罪に区別して述べています。先ず、この天津罪と国津罪の相違についてお話し、次にそれぞれの罪の内容の説明に入ることといたします。

天津罪を辞書で見ると「須佐之男命が天上で犯したいろいろの罪。畦放・溝埋・樋放・頻蒔・串刺・生剥・逆剥・屎戸等」とあり、国津罪には「わが上古の罪過の一。高天原に起原を有する天津罪に対するもので、生膚断、死膚断など十三種ある」と説明されています。神話の中での説明としたら、これで間に合いましょうが、現実の社会の中でどの様な内容の罪なのか、はっきりしません。その解釈には言霊学が必要となります。以前、天津神と国津神の相違について説明した事があります。天津神とは人間精神の最上次元に位する清浄無垢な高天原を構成する神、言い替えますと、高天原精神界を結界している五十音言霊を示す神名。またその五十音の動きを顕わす五十の神名の合計、即ち古事記言霊百神の事であります。(以上の言霊百神で構成される言霊五十音図を上下にとった百音図の構造の部分々々を表示する神名、例えば天こやねの児産命、思金おもひかねの命、布刀玉ふとだまの命、天うずめの雨受売の命、天たの手力ちから男の命等々含めることもあります。)

以上の天津神の意味を念頭に置きますと、天津罪の内容がはっきり理解されて来ます。即ち高天原精神界を構成する言霊五十音の配列ま

たはその運用を狂わす事、それが天津罪であります。キリスト教で謂う「原罪」がこれに当たります。神話での説明「須佐之男命が天上が犯した罪」、これを説明しますと、須佐之男命が姉神、天照大神の精神原理である五十音言霊の原理に飽き足らず、物質の原理を求めて、精神の五十音言霊図表を荒らした罪の内容であることがよくお分かり頂けると思います。

五十音の言霊そのものは人間精神を構成している究極の要素であり、人間なら誰しも平等に付与されていて、これを穢したり、乱したり出来るものではありません。言霊自体は善悪、美醜、正誤、損得の外にあるものです。それを穢し乱すとは、人間精神の構造を表わす五十音言霊図の構造やその動かし方を乱し、穢す事であります。この言霊構造とその運用を乱す事によって人間社会の中に混乱と不安が生じて来ます。これが天津罪であります。

天津罪に対して国津罪とは、言霊構造とその運用法という精神最奥の原理に関係なく、人間が平常の日々の生活の中で犯す、謂わば自我の欲望、利害、感情等の赴くままに他人や社会の秩序を乱し、不利益を与える普通一般で見られる所の罪業の事であります。例えて言えば、人を殺したり、傷付けたり、盗んだり、だましたり、姦淫したり、嘘をついたりする罪の事であります。謂わば現在の刑法で罪の対象となる罪の事です。

以上、天津罪と国津罪に相違についてお話して来ました。では天津罪と国津罪とは全く関係ないか、と言うとそうでもありません。キリスト教で原罪とは人間がこの世に生を受けて生まれた時から背負っている罪と言いますように、天津罪とは人間の心の営みが行われる精神の領域の拠って立つ土台である社会の精神土壌全体の調和を根本から混乱させている罪という事なのであります。人間精神または社会精神の土台を乱す罪が天津罪であり、その不安定、不調和な土台の上にあるが故に、助長された自我主張が惹き起こす表面的な罪が国津罪という事が出来ます。

さて、次は天津罪の中の個々の罪について説明して参ります。大祓祝詞には畦放ち、溝埋め、樋放ち、頻蒔き、串刺し、生剥ぎ、逆剥ぎ、

くそど
屎戸の八つの罪が説かれています。

あはな
畦放ち

古事記の神話では、天照大神は^{みつくだ}菅田を耕していらっしゃいます。また^{かむみそ}神衣を織っていらっしゃいます。田も衣も縦横に線を引いた形である所から、五十音言霊図表に基づいて言霊を運用し、人類の歴史を創造して行く事を表徴しています。天津罪の「畦放ち」とは五十音図表の言霊を仕切っている線、即ち畦を取り去ることを言います。五十音図の言霊の縦の配列は五つの次元の相違を、横の配列は八つの父韻による^{あぜ}実相変化の律を表わしますから、その仕切りである畦を取り払う事とは文明創造の営みの秩序を破壊することと受け取られます。

みぞう
溝埋め

溝とは水を流すため地面を細長く掘ったものを謂います。五十音言霊表の運用を潤す生命の流れの通り路を埋めて言霊の気の働きを妨害すること、と思われます。

ひ
樋放ち

ひ
樋とは水を導いて送る長い管、またはせき止めた水の出口に設けた戸で、開閉して水を出入りさせるもの、の事と辞書にあります。人間の生命の流れは母音より八つの父韻を通り半母音に向って流れます。アよりワ、イよりヰ、エよりヱ、オよりヲ、ウよりウに流れ、それぞれ歴史を創造します。その流れの緩急が程よく行けば社会は常に平穩無事でありますが、母音より半母音への流れ路が取り払われ、また緩急の調節が出来なくなると、社会の進歩は急変または停滞することとなります。これが樋放ちであります。

しきま
頻蒔き

穀物の種子を播いた上に重ねてまた種子を播き、穀物の生長を害すること、と辞書にあります。天照大神の菅田は音図向って右から左へア・タカマハラナヤサ・ワの順で種子が播かれます。その事で物事は始めより終わりに向って滞る事なく遂行されます。それが例えば、タから始まり、タカマまで来た時、マに表徴される事態が既にほとんど完了してるのに、その過程の百パーセントの完了に執着して、マ・マ・マと何時までもその段階の行為を繰り返し、先に進まないような事態

に陥る状態を指している事でありましょう。

串刺し^{くし}

人間の文明創造活動を言霊によって示す言霊五十音図表は縦五列、横十列の言霊の並びがあります。縦に次元の順序、即ち位置師を、横に実相の移り変わりの変化のリズム、即ち時置師、処置師の働きを示します。この縦横の順序や変化の推移を示す言霊の並びを、あたかも団子に串を刺すように固定してしまい、社会がその時処位に応じて、自由に新しい文化を作っていく事が出来ないよう規制してしまう事、これを串刺しと言います。信仰や信条、または社会的哲学、倫理学、経済学等の経験的知識に基づいて制定された道徳や国家体制、憲法、法律等は往々にしてこの串刺しという天津罪を犯す事となります。近代に於ける世界の共産体制の崩壊などもこの串刺しによる国家社会の硬直化がその原因と考えられます。

生剥ぎ^{いきは}

生命活動を表わす五十音図表の中の縦の五母音の中の一つ乃至二つの並びを剥ぐように抹殺してしまう事。即ち生命活動として当然具備されている性能を何らかの理由の下に無視してしまう事。これが生剥ぎです。例えば近代共産体制にあって「宗教は阿片なり」の教義の下に言霊アに属する信仰性能を否定してしまった等がこれに当たります。人間の生きた生来の性能活動を社会から抹殺する罪であります。

逆剥ぎ

逆剥^{さか}は性剥ぎ^{さか}であります。性とは現象の実相を決める八父韻の働きの事です。逆剥とはこの八つの父韻の並びの中から一つ乃至二つのものを無視・抹殺する罪のことであります。例えば信仰行為に於いてタカラハサナヤマと並ぶ父韻の並びの中から、信仰に於いて最も必要である筈の主体性の確立を表わす言霊タの自覚を抹殺し、教祖の教えをそのまま暗記させ、教団の利益にのみ奉仕させるよう洗脳する行為等がそれに当たります。最近の宗教団体による詐欺行為などはその典型であります。また近年の教育にみられる「偏差値」による受験勉強なども逆剥ぎの傾向が充分窺えます。双方共、信仰または教育の真の目的を成就する手順の中の何らかを無視した事の結果であります。

くそど
屎戸

古事記神話に「大嘗聞^{にへ}こしめす殿に屎まき散らし」とあります。屎とは組む素で五十音図表を構成しているそれぞれの言霊のこと。五十音図の縦横の並びの順序の如何を考えず、バラバラにして播き散らしてしまう罪であります。須佐之男命が高天原に於ける天照大神と月読命との三貴子の協調体制から離脱し、高天原の精神構造を表わす天津太祝詞音図の組織をバラバラにして、自らが求めようとしている物質世界の法則を探ろうとして、その構成に躍起になった様子、即ち「須佐之男命、依さしたまへる国を知らさずて、八拳^{やつひげむなさき}須心前に至るまで啼きいさちき」がこの罪に当ります。

以上、大祓祝詞の天津罪の一つ一つについて説明して来ました。御理解頂けたてでありませうか。この天津罪について一つ付け加えておきたい事があります。天津罪といわれるそれぞれの罪の内容は、ここ千年、二千年の歴史の中では、それが悪い事だと思われず、当然の如く行われてきた事なのであります。「大道廃れて仁義あり」と言われます。「大道」と呼ばれた言霊布斗麻邇の原理が社会の表面から隠没した後、人間社会の政治・道徳の判断をするに当り、人間天与の判断能力（言霊工）を忘れ、その代用品として各国家の法律とか「何々すべし」「何々すべからず」の規則によって善悪の判断をせざるを得なくなりました。そして、その代用品である、第二、第三次的な規則による人間行為の規制の世の中が長く続く事によって、人々はその規則以外に善悪判断の基準はないものと思ひ込んでしまいました。第二、第三次的規準でありますから、人々は時によってその定められた自らの法律を社会全体が遵守できない事態も起ることとなります。「超法規的措置」という言葉が使われます。この時、人々は「何が良い事か、悪い事か」の判断が分からなくなります。この様に現代の人々の何が良く、何が悪いかが分からなくさせる原因となるもの、それが天津罪という罪なのだ、という事が出来るのです。「人間とはそも何物ぞ」という根本原理である言霊布斗麻邇の学問が復活して、ここに初めて天津罪の内容が明らかとなりました。

次に国津罪の説明に移ります。国津罪として大祓祝詞には、^{いきはだ た}生膚断ち、^{しにはだ た}死膚断ち、^{しらひと こく み}白人胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、^{けもの}畜犯せる罪、^{はふむし}昆虫の災、高津神の災、^{けものたは まじもの}高津鳥の災、^{まじもの}畜仆し、^{ここたく}蠢物せる罪、幾許の罪出でむ。の十三の罪が挙げられています。

これらの国津罪について大祓はただ十三の罪を列記するだけで、罪の内容については何一つ説明しておりません。しかし、前に述べましたように、旧約聖書の中の特に^{レ ビ キ}利未記にはそれぞれの内容の懇切な解説が載っています。大祓祝詞と聖書の利未記という想像もつかぬ地球の正反対の側に位置する国の出来事の記載が、まるで判で押した如く一致している事は、太古の世界の歴史を再編成する大きな手掛かりになる事は間違いありません。時には大祓と利未記を対比させながら国津罪を説明して行きます。

^{いきはだ た}生膚断ち、^{しにはだ た}死膚断ち

生きている人、また死んだ人の肉体を傷つける事の罪と解されます。モーゼの十戒に「汝、殺すなかれ」と書かれています。(出エジプト記)

^{しらひと}白人

辞書にしろなまずのある人。一説に今の白子の類、とあり、通説はないようです。それが旧約聖書の十三章を見ると、その説明が詳しく乗っていて、癩病患者であることが分かります。大祓とモーゼの五書の関係を知る上で参考となりますので、此処で引用します。「エホバ、モーゼとアロンに告て言ひたまはく 人その身の皮に腫あるひは^{できもの}癩 あるひは光る処あらんにもし之がその身の皮にあること癩病の患処のごとくなればその人を祭司アロンまたは祭司たるアロンの子等に携へいたるべし また祭司は肉の皮のその患処を觀るべしその患処の毛もしく白くなり且その患処身の皮よりも深く見えなば是癩病の患処なり祭司かれを見て汚^{けがれ}たる者となすべし...」(利未記十三章一～三)

^{こく み}胡久美

^{あまじし}贅肉の意で「いぼ」または「瘤」の意、と辞書にあります。聖書に「エホバ汚れたる者」と定めています。

己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪

この様な近親相姦の罪について大祓はただ四つの事柄を続けて挙げているに過ぎませんが、旧約聖書には詳しく説明されています。その一部を載せます。「汝等凡てその骨肉の親に近づきて之と淫するなかれすべ 我はエホバなり 汝の母と淫するなかれ是汝の父を辱はじかしむるなればなり彼は汝の母なれば汝これと淫するなかれ 汝の父の妻と淫するなかれ是汝の父を辱はじかしむるなればなり……」(利未記十八章六～八)この説明から直ちにギリシャ神話のエデプス・コンプレックスを思い出さず方もありません。

畜けもの犯せる罪

大祓のこの罪を利未記には「汝獣畜けものと交合して之によりて己が身を汚すこと勿れまた女たる者は獣畜けものの前に立て之と接まじはること勿れ是憎しむべき事なり」(十八章二三)「男子もし獣畜けものと交合しなばかならず誅ころさるべし汝らまたその獣畜を殺すべし婦人もし獣畜けものに近づきこれと交まじはらばその婦人と獣畜を殺すべし是等はともに必ず誅さるべしその血は自己に帰せん」(二十章十五～十六)

昆虫はぶむしの災

先師小笠原孝次氏は蝗の災であろうと解しました。利未記には「凡ての人を汚すところの匍行物はぶものに捫さはれる者……」(二十二章五)と記されています。匍行物が何であるか、今のところ分かっていません。

高津神の災

高津神と言うと、直ぐに思いつくのは天津神の事であります。天津神とは先に述べましたが、清浄無垢な高天原神界にある神を、即ち五十音言霊の事を言いますが、高津神とはそういう清浄な神界ではない、種々の因縁によって常に流転して止むことのない、まだ浄化されない霊の世界の魂のことであります。

高津鳥の災

鳥とは人と人との間を行き来して飛ぶ言霊のことであります。古事記の「天の鳥船」といえば、人の言葉を構成している五十音言霊のそれぞれの内容の事であります。高津鳥とは清浄な言霊の自覚の裏付け

のない、^{へんぱ}偏頗な経験知識に基づいた主張・主義の言葉を指します。この言葉も人と人との間を飛び交って人を迷わせ、世間を騒がせる原因となります。偽宗教者、狂信者、政治的煽動等の言動はすべてこの類のものであります。

^{けものたは}
畜仆し

牛馬豚等の四足動物を殺し、食用とすることを言うのでしょう。太古日本人は獣肉は食さないと聞いています。古書「ウエツフミ」には獣肉を食べると^{ねば}血が粘る、と書いてあるそうです。

^{まじもの}
蠢物せる罪

^{まじ}蠢とは辞書に「あやしい術で人を呪い害を加えること。まじなつて人を病ましめ、苦しめ、死なせること」とあります。一般に「まじない」の事であり、利未記に「^{くちよせ}憑鬼者^{うらないし}または^{たか}卜筮師も^{かほ}恃みこれに従う人^うあらば我わが^{むすこむすめ}面ををその人にむけ之をその民の中に絶つべし」(二十章六)また申命記には「^{うらない}汝らの中間にその^{まじない}男子女子をして火の中を通らしむる者あるべからずまた^{くちよせ}卜筮する者^{かんなぎ}邪法を行なふ者^{とぶ}禁厭する者^{まじない}魔術を使ふ者^{くちよせ}法印を結ぶ者^{かんなぎ}憑鬼する者^{まじない}巫覡の業をなす者^{とぶ}死者に詢ことをする者あるべからず 凡て是等の事を為す者は^{まじない}エホバこれを憎みたまふ」(十八章十~十二)とあります。

前にお伝えした事ではありますが、鵝草葺不合王朝六十九代神足別豊鋤天皇の時、ユダヤ王モーゼ来朝、その帰国するに当り天皇モーゼに^{みことり}詔して曰く「汝モーゼ汝一人より外に神なしと知れ」と竹内古文書に記されています。この勅語にありますように、五十音言霊学は「人とは神であり、同時に人である人」なのだを教えています。その神であるべき人が我でもなく神でもない怪しい、卑しいものに自らの運命について教えを請う事など「以ての外」の事でありましょう。人としての尊厳を汚す行為であります。易を説明する「易経」の中にも「易を知るものは占わず」と警めています。

以上でモーゼの五書と関連させた大祓祝詞の国津罪の説明を終えることといたしますが、ここで付け加えて申し上げたい事があります。大祓が国津罪の一つ一つを簡単に列挙しただけなのに対し、旧約聖書は神エホバの言葉として詳細に説明しています。「大祓に於ける人間の

罪の内容は旧約聖書をご覧下さい」と言わんばかりの関連性が窺えます。にも拘らず旧約聖書には大祓の天津罪に関する記事は何一つ見出し得ない事があります。と言う事は、鵜草葺不合朝の神足別豊鋤天皇はモーゼに天津罪に関する事を何も教えなかった、と解するべきなのでありましょう。

竹内古文書には「^{うがやふきあえず}鵜草葺不合^{みなかぬしこうぎよく}王朝五十八代御中主幸玉天皇の時、支那^{ふぎ}王伏羲来朝、之に天津金木を教う」とあります。しかし伏羲に教えたのは言霊原理の天津金木そのものではなく、天津金木の原理を陰陽概念と数に置き換えた法則を伝えたのです。伏羲はこれに則り易を興しました。同様、「鵜草葺不合王朝六十九代神足別豊鋤天皇の時、ユダヤ王モーゼ来朝、天皇これに天津金木を教う」とありますが、ここでもモーゼに教えたのは天津金木そのものではなく、金木原理をヘブライ語と数霊の法則に置き換えたものを伝えたに違いありません。それが世に謂われるユダヤの「カバラ」なのであります。旧約聖書の五書に大祓の天津罪に関しての記述がない事は以上の理由にあると考えられます。

人間には天与の五つの性能があります。アイウエオ五母音で表わします。その五つの性能の一つ一つを中心に置いた音図として、矢張り五種類の五十音図が作られます。天津菅麻（イ）^{あまつすがそ}天津太祝詞（エ）^{ふとのりと}宝（ア）^{あかたま}赤珠（オ）^{かなぎ}天津金木（ウ）の五種類です。これ等の音図は人間天与の性能表現の実相に従って同じ五十個の言霊をそれぞれ並べたものでありますから、五つの音図の中のどれ一つを知っても、思索によって外の四つの音図の構造を推定し得る可能性があります。神足別豊鋤天皇はその辺の消息を熟知した上で、モーゼには天津金木そのものではなく、ヘブライ語と数霊の法則に脚色・変化させて教え、その法則によって以後三千年にわたる世界人類の物質科学文明創造とその成果を手段とする世界の再統一の事業を委託したのでした。民族特有の言語の法則という特殊なものに置換えたユダヤのカバラの原理でありますから、これを如何に操作し、想像を逞しくしても元の人類共通の精神原理布斗麻邇には到達不可能な事があります。ユダヤによる人類の第二物質科学文明成就の暁、その事業の手段である弱肉強食

の生存競争の社会が遭遇する人類社会滅亡の危機を回避するただ一つの方策・原理である言霊布斗麻邇が大本教祖の謂う「九分九厘の一厘」の仕組となる皇祖皇宗の深謀遠慮を、大祓祝詞のこの天津罪、国津罪の説明の章に明らかにすることが出来るのであります。

さて三千年の昔、皇祖皇宗の公謀こうぼによる第一精神文明より第二の物質科学文明創造の時代に転換が行われて、物質科学文明の発達はつたの基盤となる生存競争社会は時と共に弱肉強食の相を濃くして行きました。それにつれて競争社会の中に現れる人間の罪穢けんらんも深く大きくなって行きました。物質科学文明は私達の眼前にある如く、その絢爛たる姿を現わしました。正に完成間近を思わせませす。と同時にその文明の培養土壌である競争社会の行き着く果として、地球大気の汚染、地球温暖化、人類の精神荒廃は人類全体の生存をも脅かす大罪となって現われて来ました。今こそ人類全体に蔓延した罪穢を、人類全体が自らの罪穢であると自覚し、自らの罪の払拭に取り組まないならば、三千年の長い間幾多の犠牲を払って築き上げた物質科学文明社会も、人類全体の生命と共に消滅しなければならぬ事態を迎えました。

折も折、この人類が罪穢を罪穢として自覚させる「人間とは何か」を示す鏡であり、その罪穢の袪いを予告した大祓祝詞の基礎原理である言霊布斗麻邇が二千年の闇を破り、不死鳥の如くこの世の中に太古の第一精神文明時代の姿そのままに甦って来ました。この原理によって予告された大祓の内容はすべて解明され、眼前の地球人類の危機を回避させるいとも現実的で人類に許されたただ一つの大祓の実行方法が人類自らのものとなったのであります。「大祓祝詞の話」はこれより大祓の眼目である、その人類の罪穢の修祓の方法の開示である第四章に入ります。先ずその方法を示す第四章の文章を掲げます。」

「天津宮事みやごと以ちて、大中臣、天津金木を、本打切り、未打断ちて、千座くら おきくらの置座すがそに置足らはして、天津菅麻を、本刈断ち、未刈切りて、八針とりさに取辟きて、天津祝詞ふとのりとごとの太祝詞事を宣れ。」